Interview

チェチーリア・バルトリ

ベルカントの代表的作曲家、ベッリーニの音楽をお手本にしていたショパンの歌曲は、私が今、戻りたいと思っている世界なのです。

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

私が今一番興味をひかれているのは、4つのマズルカです。私の最新CDはマリー・マリブランに捧げたものですが、彼女の研究を進めていくうちに、このマズルカにたどり着きました。マリーには10歳以上も歳の離れた妹がいて、ポリーネ・ヴィアルドといい、ジョルジュ・サンドとも大変仲良しでした。ポリーネは歌手として大成したばかりではなく、作曲家としても、そして詩人としても優れていました。そのポリーネの詩にショパンが曲をつけて歌曲にし、彼女に捧げたのがこの4つのマズルカなのです。

ショパンはマリブランとベッリーニのファンだったといいます。彼の美しい旋律は、ベッリーニの音楽の影響を受けて磨かれたものだと言えると思います。そこが私には興味深いのです。声楽の基本とされるベルカント、その代表的作曲家の1人であるベッリーニをお手本にしていたショパンの歌曲は、私が今、戻りたいと思っている世界なのです。

今まで公の場でショパンのリートを歌ったことはありませんでしたが、このようなアプローチをしてみると、ショパンの歌曲を身近に感じることができ、そして歌いたいと思い始めました。

彼がマリブランにどれだけ傾倒していたかは、作曲の先生に宛てた手紙からも見て取れます。『歌とは如何なる物か、パリにいるものだけが理解しうる。パスタ（ジュディッタ・パスタ）ではなくマリブランこそが、ヨーロッパの声楽界の女王と言えることが、今日明らかになった。その素晴らしさは驚嘆すべきものだ』と1831年にしたためています。そして、ベッリーニもまた、マリブランをミューズとして崇めていましたので、これらの憧憬を音楽の中から感じ取るためにも、ショパンの歌曲は私にとって魅力的なものなのです。

来秋に3度目の来日を果たすチェチーリア・バルトリ。もしかすると、日本でショパンの歌曲を聴くことができるかもしれない……
©Decca/Uli Weber

マリブランの若過ぎる死後、ポリーネは歌を始めますが、人々がマリブランの生まれ変わりだと噂するほど、外見も似ている上に、同じような音色のメゾソプラノの声を持っていました。そんなポリーネにショパンが歌曲を捧げたいと思うのは当然でしょう。

そして、姉と違って長生きをしたポリーネは、その後、ブラームスやベルリオーズ、ワーグナーやマスネ、フォーレ、グノーなどたくさんの作曲家を擁護し、例えばブラームスの《アルト・ラプソディ》など重要な作品の初演に関わっています。姉と似た声と芸術家としての素質を持ったポリーネのキャリアは、そのまま、マリブランが辿ったであろう足跡として大変興味深く感じられます。

マリブランの音楽的足跡を再現するため、CDの発売後コンサートツアーも始まっていますが、彼女を探す旅はまだまだ続くのです。その仕事の一環として、是非いつかこの作品を、リーダーアーベントで歌ってみたいと思っています。この歌曲は録音も出ていますが、マリブランの声に似ていたというポリーネのために作られたリートを演奏することによって、私の目標であるマリブランの再現が達成されます。次回の来日予定は、2008年の10月と決めました。もしもピアノ伴奏でプログラムを組むのでしたら、第一部をショパン／ヴィアルド、第2部をマリブランとリストのフランス歌曲などにしてみたい、とアイディアを練っているところです。